

図1 条件ごとの動物の致死処置に関する許容度（動物実験関係者）

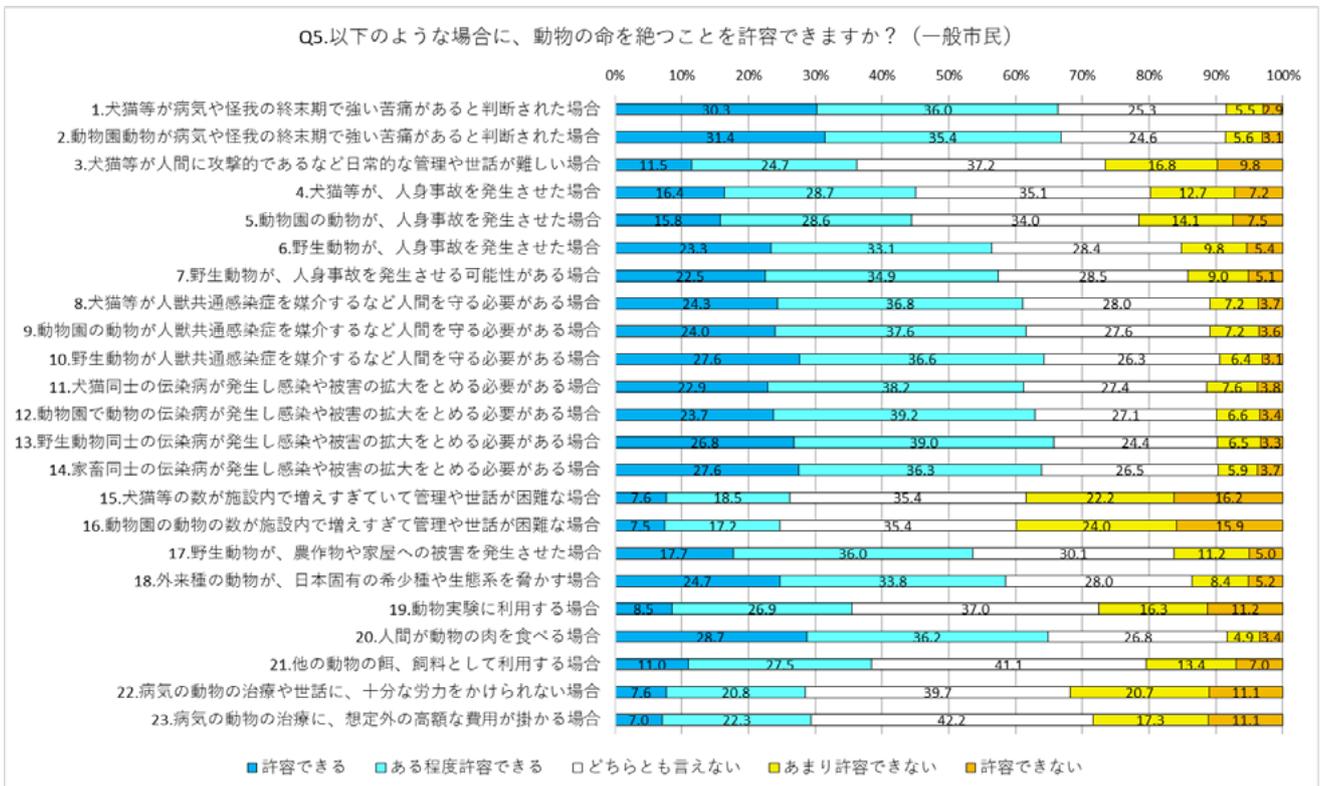


図2 条件ごとの動物の致死処置に関する許容度（一般市民）

【動物実験関係者と一般市民の格差】

こうした中で、動物実験関係者と一般市民の回答に大きな隔りがあるのが、19.動物実験に利用する場合の致死処置である。動物実験関係者の許容度は高いが、一般市民の回答を見ると、飼育者側の都合による致死処置とさほど変わらないほど許容度が低い。

この19.動物実験における致死処置については、動物実験関係者の使命、知識、経験に照らせば、許容度が高いのは当然のことである。そもそも実験結果を確認するために、最終的には多くの動物が解剖されることとなるし、毎年利用が数十万匹に及ぶ動物を実験終了後に終生飼養することなど非現実的である（そもそも遺

伝子組み換え動物は一般環境に持ち出すことはできない）。これらの致死処置は、動物実験関係者から見れば自明のことであり、多くの回答者が「許容できる」と明言している。

ところが、一般市民の回答を見ると、許容度がかなり低い。動物実験の社会的意義や具体的作業が理解されておらず、また動物福祉に配慮した飼養が行われていることについて情報が伝わっておらず、動物保護団体によるネガティブキャンペーンによって残酷なイメージが固定化しているのであろう。また、自分や家族の日常的な病気や怪我の治療など、動物実験の恩恵を受けているのは一般の市民や消費者であるが、そのことが伝わっていないので

あろう。動物実験への社会的理解を得るための情報発信を継続していく必要がある。

なお、24.実験終了時の致死処置と25.余剰動物の淘汰については、市民意識調査の時には項目として入れていなかった。専門家意識調査において新たに追加したところで、これらについても動物実験関係者は、その必要性を明確に肯定している。この項目は、他の専門分野の回答者との比較において興味深い傾向を示しているので、後述したい。

3. 動物の致死処置や動物実験に対する価値観・評価

条件や根拠を具体化した致死処置への許容度ではなく、動物の致死処置全体に対する価値観や、

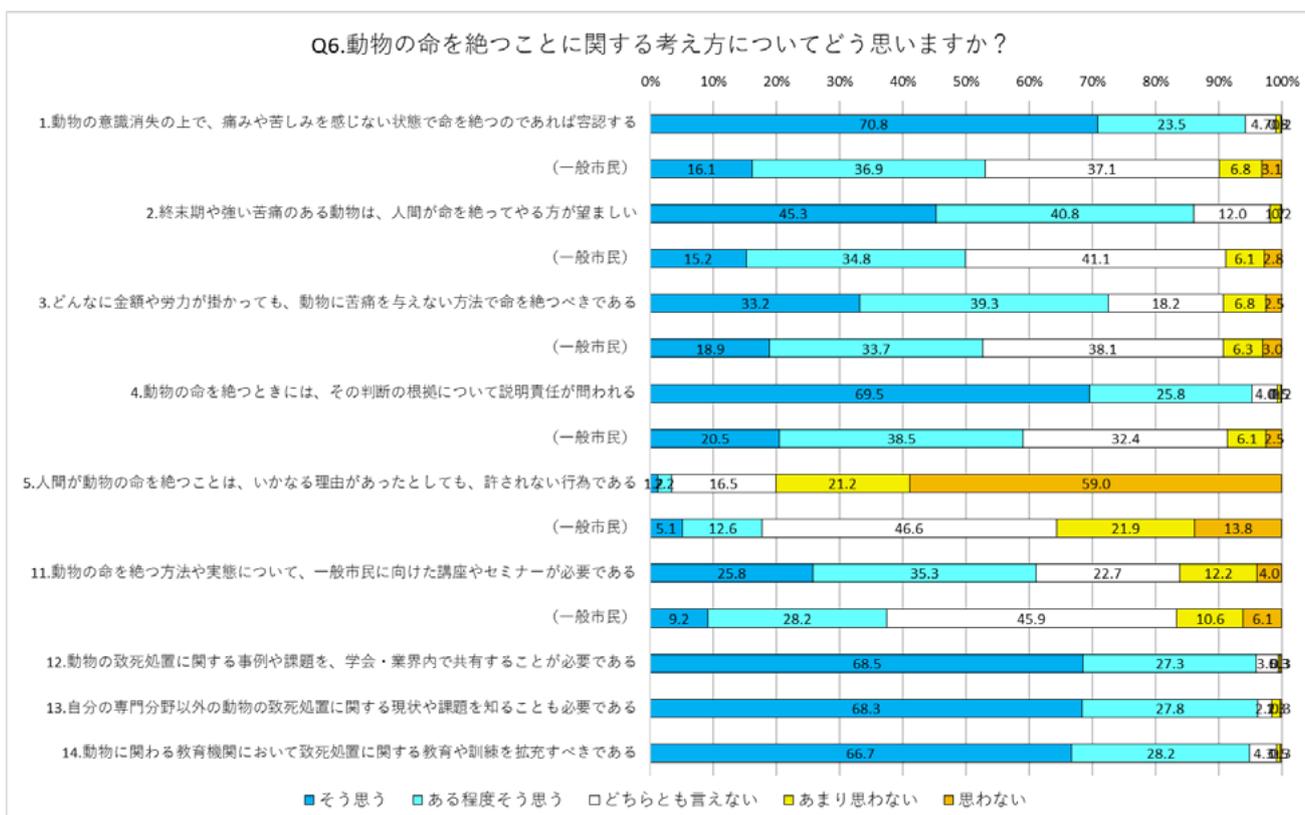


図3 動物の致死処置に関する考え方（動物実験関係者）

動物実験に対する自己認識など、幾つか興味深い結果を示したい。

【動物の致死処置に関する考え方】

致死処置に関わる大枠の価値観を問うたQ6は16項目が設定されているが、紙幅の都合上一部を紹介して説明する。いずれも賛否両論あり得る項目を列挙しているが、一般市民が多くの項目で4割程度の「どちらとも言えない」の回答があったのに比べて、動物実験関係者は、自らの意見を明確に定めている。

まず、動物の苦痛に関しては、1.苦痛のない致死処置への容認や、2.苦痛のある動物への積極的な安楽死処置については、動物実験関係者は明確に賛同する割合

が高い。そして、3.どんなに金額や労力が掛かっても苦痛を与えない方法、4.判断根拠についての説明責任については、動物実験関係者は、一般市民より明確に使命感や責任感を持って向き合っていることが分かる。

それに比べて、5.人間が動物の命を絶つことはいかなる理由があったとしても許されない行為であるという項目については、明確に否定する声が強い。動物の権利を主張する運動論や机上の立論には与しない様子が読み取れる。

最後に、動物の致死処置をめぐる議論に参画する主体性についてであるが、11.一般市民に向けたセミナーが必要であるかどうかは、明確に賛同する回答が多いわ

けではない。他方、専門家意識調査で新たに追加した12.学会・業界内での情報共有、13.他の分野との情報共有、14.教育機関での動物の致死処置に関する教育訓練の拡充については、多くの回答者が、その必要性に強く共感している。学会内でこれらのテーマを積極的に議論していくこと、他分野とも交流しながら議論を進めること、そして動物に関わる学部等での動物の致死処置に関わる教育プログラムを構築することなど、分野横断的に検討すべき時機を迎えていると言えよう。

【動物実験に関する自己認識】

Q17では、動物実験に関する回答者の価値観を問うている。3Rsの原則に関しては、数の削減や代

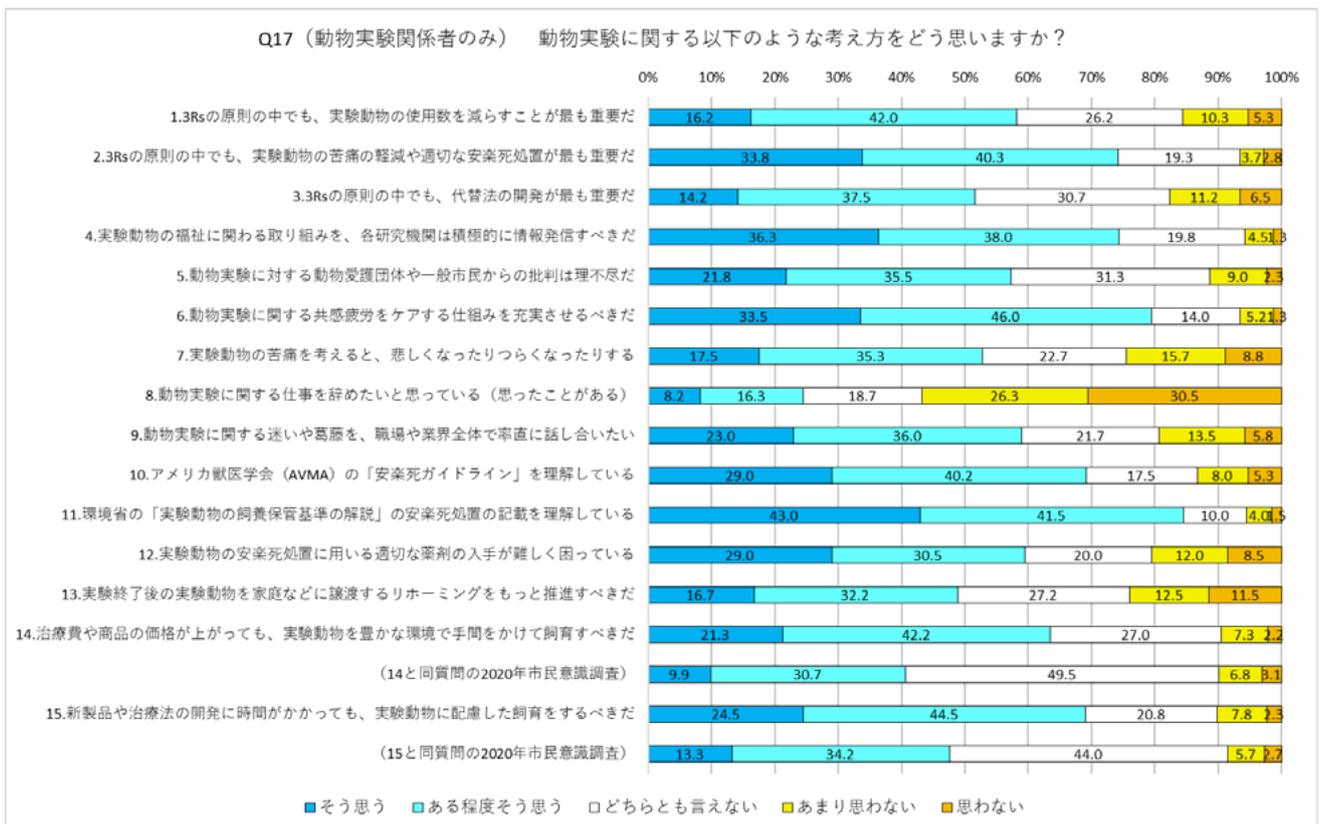


図4 動物実験に対するイメージ

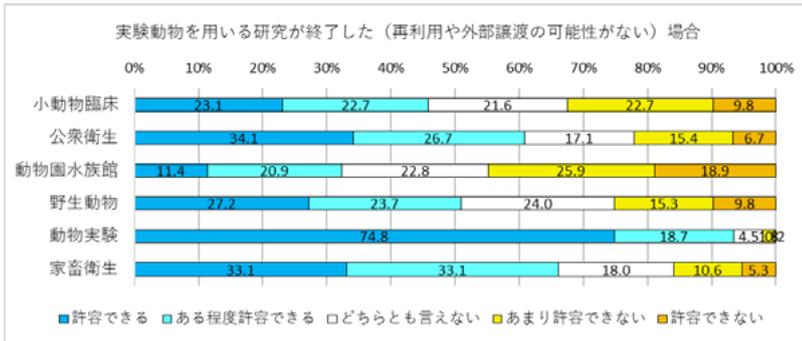


図5 他の分野との比較（動物実験終了時について）

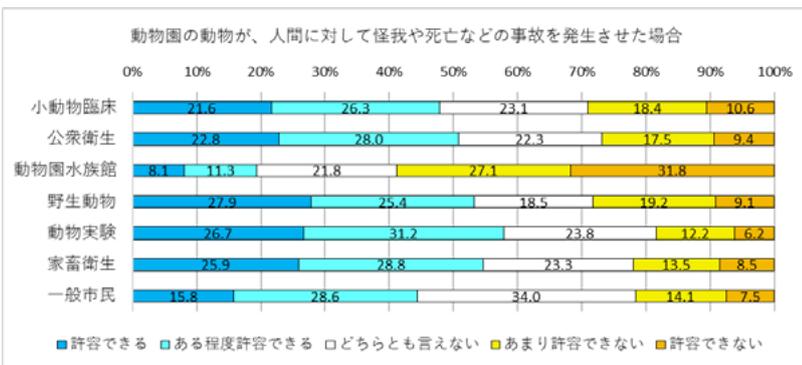


図6 他の分野との比較（動物園での人身事故について）

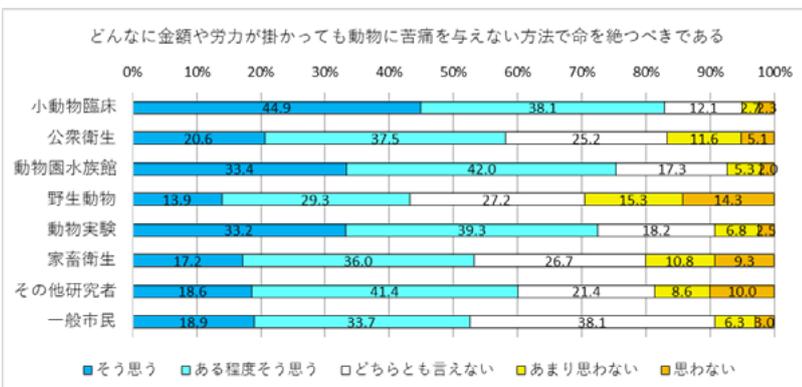


図7 他の分野との比較（致死処置のコストについて）

わる人々に対する批判や懐疑の姿勢ではなく感謝の気持ちを持ち、そして致死処置における動物福祉の向上のために人材育成や予算の確保を考えていかねばならない。そのためにも、動物に関わる専門家が分野横断的に相互参照しながら議論を深めていくことを期待したい。

なお、科研費の最終年度の活動としての一般公開シンポジウムを2026年3月8日に開催する予定である。ご関心のある方は是非ともご参加いただきたい。

（本稿は、「2023年度科学研究費 動物の致死処置の概念整理と、致死処置に関わる人々の苦悩や葛藤の研究（課題番号JP23K01758）」の成果の一部である。）

（日動協ホームページ、LABIO21カラーの資料の欄を参照）